

福田歓一著『政治学史』東京大学出版会、1985年1月25日刊を読む

古典の引用は、カードにして、正確に読み上げる

1. (1) 「文章体の講義ノートも作らず」、
(2) 「ルーズリーフ式のノートにメモを書いて、随時新しいものと差し替える」
(3) 一方、「直接の引用は、カードにして、正確に読み上げる」(以上)を(講義の)例としていた。
2. (1) (その理由)一つには、「そのまま文章になるように話すことに慣れていたから」であり、
(2) それ以上に、わたくしが聴講した当時、講座の前任者である故南原繁先生が、ただメモだけを手にして、
(3) 「筆記するより理解に努めるように」と語りかけられた姿が、頭に焼き付いていたからである。
3. (1) こういう次第で、年によっては事前にメモ式の「講義要綱」を学生に提出して、聴講の便を図ったこともあったが、
(2) おおむね、東京大学出版会教材部のプリントに任せて、できるだけそれを校閲することで、申し訳としてきた。
(3) 他日、通史を書き下す日を期して、資料等いささかの準備を積んで行ったことはいうまでもない。

*以上、525ページより引用

<コメント>

1. (1) 名著「政治学史」の著者である、福田先生による東京大学法学部の「西洋政治学史」の講義の方法がよくわかる一節です。
(2) 「直接の引用はカードにして、正確に読み上げることで講義を進めるのを例とした」とあります。
(3) 「直接の引用は、カードにする」は、「古典を読む」参考になります。
2. (1) 西洋政治思想史に限らず、これぞという「古典」を読むときの基本は、「大切なところは、カードにする」ことかもしれません。
(2) まして、先生や、先生を目指す方には、大切な文献は「カードにする」、それを「正確に読み上げる」は、参考になります。
(3) 「古典」と呼ばれる大切な本を読むときには、「カードにする」、(ルーズリーフ式の)「ノートを取りながら読む」。これが、宇野重規先生のおっしゃる「西洋政治史思想史における読みの伝統」の一つの方法かもしれません。
3. (1) (ルーズリーフ式の)「ノートを取りながら講義の準備をする」
(2) 「古典は、カードにする」
(3) 皆様は、どのように授業の準備をし、また「古典」を講義の中に取り入れておられますか。このようなことを考えながら、名著、福田歓一著「政治学史」をお読みください。

2019年8月12日(月)6時57分